

活動意欲の向上を目指したコンピュータ部指導の成果

北風裕教* 神田全啓** 藤井忍** 稲垣歩*** 岡宅泰邦*

A Report of Computer Club Activities Instruction for Improving the Students Motivation

Hironori KITAKAZE, Masahiro KANDA, Shinobu FUJII,
Ayumu INAGAKI, and Yasukuni OKATAKU

Abstract

Although our computer club of Oshima National College of Maritime Technology has activity histories more than 30 years, in recent years, most of the members are introverted, and their activity will be low. In order to solve the problem, we've worked on improvement program of the club instruction for these six years and got the improvement of their aggressiveness and computer technology. Their motivation has been progressed through rebuilding of the club organization administration and their participation to the regional activation. The program is supported by the fund of SAIKYO BANK and we thank.

Key words: local reactivation, reactivation of Suo-Oshima town, computer club

1. 緒言

現在、大島商船高等専門学校には合わせて 29 のクラブおよび同好会がある。中でも、本校の文化部の 1 つであるコンピュータ部は 30 年以上の歴史があり、過去には全国高専プログラミングコンテストで最優秀賞を受賞した輝かしい実績も見られ、最先端の情報技術を学ぶには適した学習環境を有している。

しかしながら、新入部員の多くは内向的な性格の学生が多く、人とのコミュニケーションを著しく嫌う学生が集まる傾向が見られた^[1]。また、厳しい指導に弱く、注意を受けたら部活を休み、その後、辞めてしまうという傾向が多々見られた。本校卒業後の厳しい社会状況を乗り越えることができる適応力が求められるなか、内向的でコミュニケーション能力の低い学生が集まり、部活動として機能しないばかりか、部の継続さえ心配されるほど暗いイメージの雰囲気の状態に陥った。

そこで、平成 19 年度から顧問教員が指導方針の工夫を行うことにより、内向的な性格を克服させながら徐々にではあるが、活動的な結果がえられるまでに状況を改善してきた。我々が行ってきたこの数

年間の段階的な指導方法について記述し、部員が意欲的に活動を行うことができるに至った指導方針と 6 年間の記録について記述する。特に、意欲向上の原動力となったインターネットテレビの開局・運営による部員の活動の変化および、学生へのアンケート調査をまとめたので合わせて報告する。

2. 段階的指導法

コンピュータ部を立ち直らせるために、顧問教員の間で指導方針の決定を行い、段階的に指導を行う方法を実施することとした^[1]。

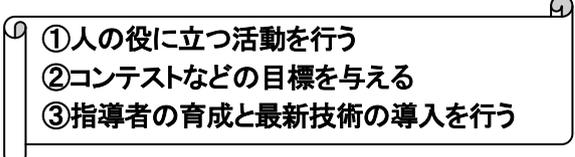
- 
- ①人の役に立つ活動を行う
 - ②コンテストなどの目標を与える
 - ③指導者の育成と最新技術の導入を行う

図1 コンピュータ部の指導方針

図1にコンピュータ部の指導方針を示す。この方針を継続的に実施することにより、平成 19 年度には、兼部学生を含めて部員が 10 名となり、その後、徐々に部員が増加した。図2に、平成 19 年度から現在ま

でのコンピュータ部の部員の推移を示す。平成 25 年度では 41 名の部員が意欲的に活動し、様々なコンテストに入賞できるまでに至っている。

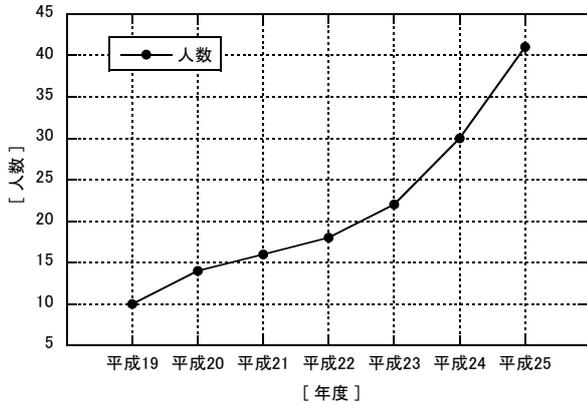


図2 コンピュータ部の部員の推移

以下に、コンピュータ部の学生の特徴を示し、これらの特徴を活かしながらも、顧問が行ってきた段階的な指導方法について具体的に記述する。

2.1 従来のコンピュータ部の学生の特徴

コンピュータ部に所属する内向的な性格の学生は、ゲーム・ネットサーフィン、アニメ鑑賞といった『おたく』と呼ばれる特徴を持っている。10年前は、プログラムを開発するよりかは、これらコンテンツを見て楽しむ時間が多く、部員間で話をするのが少ない状況であった。また、上級生が下級生を指導するという力もなく、顧問教員からの指示待ち学生がそのほとんどで、特に指示がなければ、だらだらと時間を過ごす特徴を持っている。最新技術を開発していくには、最新技術を知っておく必要があるため、全てが悪いわけでないが、度を過ぎてネットゲーム廃人となり、本校学生相談室に生活面において世話になる場合もあった。改善が見られずに何人も学生が過去に進級することなく退学していった。

新入部員の学生も、入部当初はプログラム開発やゲーム開発を目指しているが、入部して半年後には、ソフトウェア開発には、高度な数学の知識が要求されることと、授業で習うプログラミング言語の知識だけでは、CGやGUIを駆使した自分の理想とするプログラムが作成できない現実を知るため、地道な努力を怠り開発を諦める学生が増える状況であった。

2.2 ①人の役に立つ活動を行う

当時のコンピュータ部のメンバーの多くは、人とコミュニケーションを取ることが苦手な学生が多く、内向的な性格が原因で社会に溶け込むことを避けてきた学生が多かった。社会に溶け込んだ活動を少しずつ取り入れることが、彼らの成長へと繋がること

を確信し、本校が過去から現在に亘り力を注いできた地域再生の活動に、情報技術を導入する形で社会に関わることを考えた。

地域再生の活動でどのような事ができるか部員に話し合わせた結果、大島商船インターネットテレビ局を立ち上げ、地域で活躍する企業や個人事業主などを紹介する Web 番組を公開するという方針を導き出した。過去に周防大島町に U ターンした若手起業家の方が、金魚島インターネットテレビという Web 番組を作成しており、その撮影を手伝ったことが非常に良い経験となったことがきっかけである。

交渉から実際の取材、撮影、映像編集、Web へのアップ作業の全てをコンピュータ部の学生が行う。顧問教員は、その支援と教育、学生引率を行う。これにより、地域再生を通して、コンピュータ部が社会へ少しずつではあるが繋がりを持つようになり、学生の内向的な性格が徐々に、「自分でも活躍できる」という前向きな姿勢へと変化をみせた^[1,2,3]。番組取材の様子を図3に示す。



図3 番組取材の様子（販売店と採密）

制作した番組は、これまでに 50 番組を超えており、中国地区の人だけでなく、九州地区、関西地区、遠くは関東地区、東北地区の人でも Web 番組を見ていることも確認できた^[2]。現在も番組制作を続けており、これらの活動の詳細は 3 章に示す。

2.3 ②コンテストなどの目標を学生に与える

人の役に立つ活動を目指した地域再生の取り組みは、内向的な性格を徐々に、外向的で社会性のある

人材へと成長させていった。大島商船インターネットテレビの取材先で知り合った方々は、地道な活動を精力的に行っており、特に、起業家の方々のモチベーションの高さと実行力に影響されて、学生は将来の事を真剣に考えるようになっていった。

我々は次の段階として、本来学生が部活動として、プログラム開発や CG・音楽などのメディアコンテンツの制作の際に要求される、創造力と情報発信力を養わせることが重要であると考え、「地域再生に携わる者として何か新しいアイデアを提案してはどうか。」と学生に投げかけた。学生は、これまでの取材経験から独自の改善法などを考えていたようで、過疎化・少子高齢化の現状に対する打開策について部活動の時間は勿論、部活動の時間以外でも地域再生についての話をしている機会が増えたようであった。これがきっかけとなり、地域再生のための提案型コンテストに学生が自ら投稿するようになり、平成 21 年第 1 回観光甲子園で特別賞（神戸国際観光コンベンション協会会長賞）を、平成 23 年には、周南町づくりコンテストで大学生部門最優秀賞、高校生部門優秀賞、平成 24 年には、同コンテストにおいて、高校生部門最優秀賞を獲得するまでに至った（図 4）。



図 4 周南まちづくりコンテストの受賞

また、平成 24 年度に行われた、第 23 回全国高等専門学校プログラミングコンテストでは、課題部門（少子高齢化のテーマ）において、地域再生の内容と組み合わせた内容を提出し敢闘賞を受賞した。

話し合いを持つことで、様々なアイデアが出て、それを実現に向けて継続的に審議を繰り返してまとめていくという力は、プログラム開発やメディアコンテンツ開発においても顕著な成果が現れている。これまでは、プログラム開発においては個人レベルでひたすら開発を行ってきた部員が多く、何か問題に差し掛かった際は、本を読んで改善方法を探す事までは行うが、それでも分からない場合は顧問教員からの指導があるまで問題はそのまま放置する指示

待ち学生であった。また、指示がなければ諦めてしまう場合も多かった。しかし現在では、問題が生じて参考書を読んでも自分で解決できない場合は、積極的に先輩のアドバイスを求めるようになり、それがきっかけで先輩とチームを作ってプログラム開発を行うようになった学生もいる。

コンテストへの入賞を目指すようになってからは、プログラム内容にも変化が見られるようになっていく。昨今の様々なコンテストで入賞してきた他高専や他大学の技術を取り入れた内容に興味を持つようになり、その技術取得のために積極的に研究する学生も目にするようになった。

彼らの活躍は、中国地区高専コンピュータクラブコミュニティによって毎年開催されるフェスティバル形式のコンテスト（コンピュータフェスティバル）において、平成 22 年、23 年、24 年と 3 年連続自由部門で優勝できるまでに至った（図 5）。

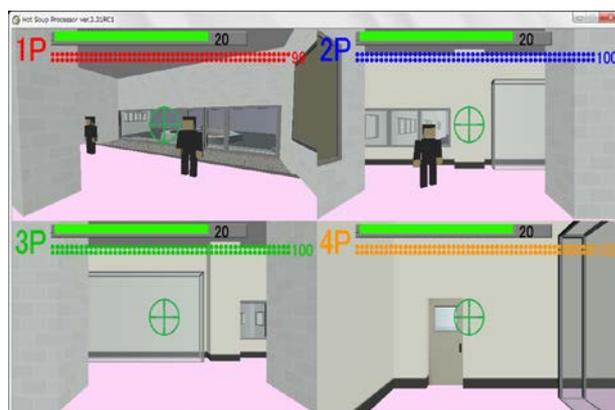


図 5 平成 24 年度自由部門優勝作品

現在は、大島商船インターネットテレビで習得したビデオ撮影技術、映像編集技術などを活かし、山口県ふるさとビデオ大賞の入賞を目指して、チームを作って日夜作品制作に情熱を燃やしている。

2.4 ③指導者の育成と最新技術の導入を行う

部員がチームを作ってプログラム開発やメディアコンテンツの開発を行っているが、各学生が 2 つないしは 3 つの開発テーマを同時進行している。顧問教員は、部員が 15 名を越えた時点で、各学生の内容の違うテーマについて直接指導することは非常に難しい状況となった。

そこで、組織が大規模になっても十分に管理できる頑健な体制を作るために、組織をピラミッド型の組織とし、チーム分割をさせて指導できる上級生が、下級生の面倒をみる体制へと強化した。出席管理や掃除など部のルール管理も徹底して行い、欠席が続く学生や部活のルールを守れない学生に対しては、

その原因についても上級生と顧問教員が確認して、指導を行うようにした。上級生は下級生から信頼を得るため、常日頃から責任を持って行動を行えるようになった。

技術の面では、指導者となる学生はなるべく多くの知識と経験が必要となるため、3D-スキャナや3D-造型機、3D マウントヘッドディスプレイの活用などの最新技術に触れる機会を多く与えることで、モチベーションの向上をはかっている。また、部費から情報関連の定期購読本を購入し、なるべく最新のPCや周辺機器について熟知するように指導している。

指導者となった学生には、各々のチームの成果をまとめさせ、顧問教員に報告、顧問教員が学生の状況把握を行い、学生の抱える問題が複雑であれば、直接顧問が指導を行う体制をとっている。また4ヶ月に1度のペースで全体報告会を行い、プレゼンテーションソフトを使って質疑応答を含め5分から10分程度の発表を実施している（図6）。



図6 全体報告会

3. 大島商船インターネットテレビ活動での飛躍

指導方針を決定してから、順調にクラブ活動として機能するようにレベルアップを行ってきたが、ある段階で急激な伸びが無くなった。それは、品質や完成度の問題となって顕著に表れた。コンピュータ部で準備できる開発ソフトウェアは予算的な問題から、フリーウェアかもしくはシェアウェアと呼ばれる安価なアプリケーションであった。そのため、ハイビジョン映像などの高品質な撮影、音楽、編集が全く行えない状況となり、ハイビジョン映像が当たり前となった現在では、明らかに劣った作品しか制作が出来なかった。この技術対応には、機材や編集道具などの装置を購入する必要があり、予算の面が大きな壁となった。

この問題の改善策として、コンピュータの借用と、予算請求、プロによる編集作業の教育があげられる。以下に、詳しく説明する。

3.1 コンピュータの借用による編集作業の改善

本校では、平成20年度から、文部科学省科学振興調整費（現在の文部科学戦略推進費）を利用して、一般の方を対象に、起業家養成塾（以下、プロジェクトの愛称である「島スクエア」と呼ぶ）を5年間かけて行ってきた。ここでは、Web動画クリエイター養成コースがあり、ネット販売の講座やWebデザインの講座が開催されていた。講座では、動画を撮影するための高価なビデオカメラやそれら撮影された映像を編集するPCとソフトウェアを利用していたが、現在はこの大型プロジェクトが終わったことから、物品が利用されていない状況にあった。そこで、AdobeのCSシリーズのソフトウェアが導入されたPCとデジタルビデオカメラを借用することで、準備を整えた。

3.2 外部資金の申請

撮影を行うためには、取材のための旅費など様々な経費が必要になる。コンピュータ部も予算があるが、陳腐化した開発用パソコンの修理費・維持費、テキスト購入費に利用され、予算が残らない状況で、資金の調達が必要となる。これまでは、校長裁量経費（平成19年度、平成20年度、平成24年度）の申請を行うことで、活動費を補ってきた。

しかし、それでも厳しい状況であるので、西京銀行の一部報奨金（地域の活性化を目指す「はつらつ長州」寄付金）の申請を行ってきた（平成22年度、平成25年度）。採択内容としては、起業家の取材を行って大島商船インターネットテレビで放送することや、起業家の養成講座を本校の学生に対して行うことなどである。

また、山口県教育公務員弘済会研究助成金を利用して頂くことで、学習用のテキスト購入を続けている（平成21年度、平成22年度）。これらの外部資金の調達により、予算の面においての問題をクリアしてきた。

3.3 プロによる撮影技術の指導

島スクエア³⁾の講座（Web動画クリエイター養成コース）において3期生の修了生が、ビデオ撮影や映像編集を行っており、結婚式や企業のイベント、祭事などの記念ビデオの制作会社を立ち上げてプロとして実際に活動している。プロの実践的な技術の習得のために、本校のコンピュータ部の学生を対象にして、映像撮影の基本から、構図・アングル、撮影テクニック、特別な撮影機材や映像編集技術などの講座を開いて頂き、ハイビジョン映像でも耐える番組制作について学ぶ機会を与えている（図7）。



図7 逆光時の撮影における技術指導の様子

また、周防大島町内で活躍される起業家の方々に、周防大島町の魅力や特産品などのアピールポイントについて講義を受け、より良い番組作りを目指すようにもした(図8)。技術の向上だけでなく、彼らの地域再生への心構えも一層養われたと同時に、彼らのモチベーションも向上した。



図8 起業家の方々による指導風景

技術指導に関しては、上級生から下級生に対しても、これまでの撮影経験をもとにした指導が部活中に行われており、下級生もプロからの指導と先輩からの指導によって、大きな成長が見られた。

3.4 オープニングとエンディングの制作

大島商船インターネットテレビのWebページを、図9に示す⁴⁾。本校の北風研究室のページに掲載されており、誰でもアクセスをすることができる。

(http://www.oshima-k.ac.jp/kitakaze/project3_shoushen.php)



図9 大島商船インターネットテレビWebページ

これまでの、大島商船インターネットテレビの番組では、オープニングとエンディングは、フリーの曲を利用して作成したため、周防大島の地域再生をイメージできるものではなかった。また、毎回統一したものではなかった。

そこで、山口県で活躍するシンガーソングライターのマウンテンマウスに大島商船インターネットテレビの曲を作成してもらい、本校コンピュータ部のマルチメディア担当学生が、曲に合ったアニメーションを制作することで、テレビ番組のオープニングとエンディングを作成した(図10)。



図10 オープニングの画面

歌詞もテロップに表示し、小さな子からお年寄りまで楽しい気持ちで番組を視聴できる工夫も取り入れている。途中の挿入メロディもマウンテンマウスの作曲したものを利用しており、番組全体の質の向上につなげている。

3.5 ケーブルテレビとの連携

山口県の周防大島町と岩国市を網羅しているケーブルテレビの(株)アイ・キャンには、周防大島町が番組を制作して周防大島町のエリアで番組を放送する「周防大島チャンネル」という独自のチャンネルが存在する。この番組で、年に4回(3か月に1度)、大島商船インターネットテレビで制作した番組も放送されており、Webページだけでなく、活動の場を公共の電波にも広げている。番組提供を行うことで、本校の学校のPR効果もあり、お互いにとってプラスの相乗効果が表れている。

4. アンケート結果と分析・考察

学生の心境の変化について、アンケート調査を行った。アンケートは平成25年9月12日の夏休み期間に参加していた学生23名に対して行った。

4.1 現在の心境について

コンピュータ部の活動について普段どのように感じているのか、また、ストレスに思っていることは

ないかなど表1の項目について、記名付きのアンケートを行った。事前に、今後のコンピュータ部の方針の検討のために行うことを学生には伝えた。

アンケート解答欄は、“はい”、“いいえ”、“どちらでもない”の3択から解答してもらい、もし理由があれば、記入をするように伝えた。結果を図11から図16に示す。

表1 現在の心境に関する質問項目

項目	質問項目
1	コンピュータ部の活動は好きだ。
2	課題が多くてプレッシャーである。
3	先輩の実力まで早く追いつきたい。
4	もっと、最新技術の勉強をしたい。
5	利用PCの台数は十分足りている。
6	利用PCのスペックは十分である。

まずは、コンピュータ部に所属しているが、部活を好きで行っているのかを確認した。

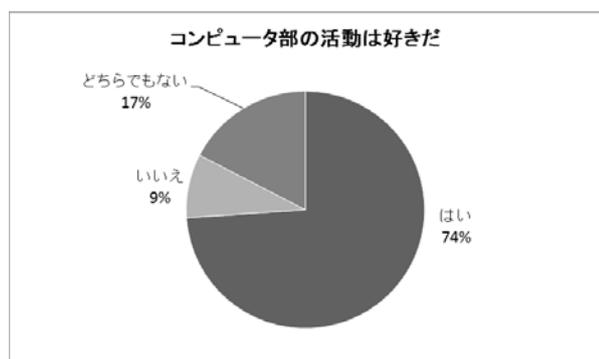


図11 アンケート結果 (項目1)

図11の結果から、部員の74% (17名)の学生は、部活を好きで行っているが、残りの26% (6名)の学生は、好きではない。もしくは、嫌いであるにも関わらず部活動を続けている。好きでもないのに続けている理由としては、「将来の就職に役に立つから」と答えている。アンケートから、これまでのコンピュータ部の活動が個人の質を高め、社会的に必要とされている部であると学生が感じていることが分かった。また、少し疲れたと答えた学生もいた。それと関連する結果が、図12である。

図12の結果から、実に44% (10名)の学生はプレッシャーを感じながら、部活動をしていることが分かる。一方、39% (9名)の学生はプレッシャーを感じてはいない。プレッシャーを感じている学生の多くは、上級生であった。下級生への指導はもちろん、各自の担当するプログラム開発もあるので、

多くの努力が必要であり、負荷が増えているようである。ただし、上級生のこれらの努力は、下級生は感じていることが、図13から分かる。

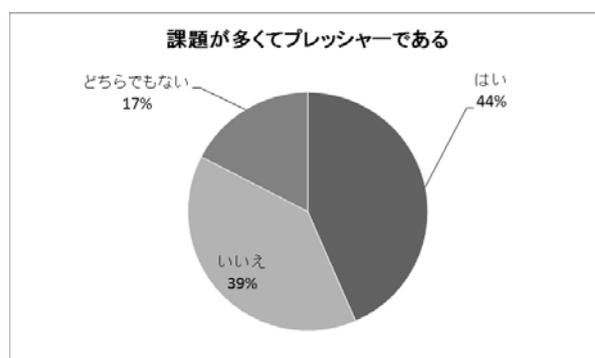


図12 アンケート結果 (項目2)

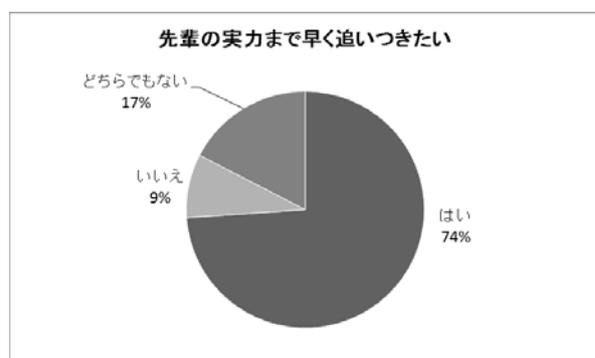


図13 アンケート結果 (項目3)

下級生の多くは、上級生に追いつき、追い越したいと思っていることが分かる。どちらでもないと答えた学生は、ほとんど上級生であった。これより、ピラミッド型の指導形態がうまく機能していると分かる。上級生は、ピラミッド型の指導形態については、よく不満を漏らすことがあった。彼らに課せられる負荷も原因の1つであるが、下級生への質問に答えられるだけの常に最先端の技術や知識を維持していく必要があるからである。その結果は、図14にも表れている。

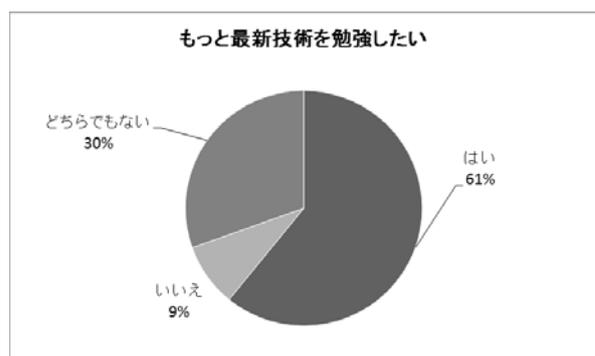


図13 アンケート結果 (項目4)

図 14 の結果から、61% (14 名) の学生がさらに新しい技術を求めて勉強したいと思っている。これらの多くは、上級生であった。どちらでもないと答えた学生は、ほとんど 1 年生であり、現在の環境で、すでに新しく覚えていかなければならないことが多くあることから、現在の環境が最新技術であると勘違いしている学生もいると予想される。現在のコンピュータ部が利用している PC は、本校の数理計画実験室にある実験用の PC であり、すべて 5 年前に購入されたものであり、最新技術を学ぶためには、陳腐化した環境である。また、41 名の部員数に対して研究用の PC を含めても 20 台の PC しかないために、一人 1 台が必ず確保されているわけでもない。部員で調整しながら、利用している状況である。そのことについて学生はどのように考えているか調査した結果が、図 15、図 16 である。

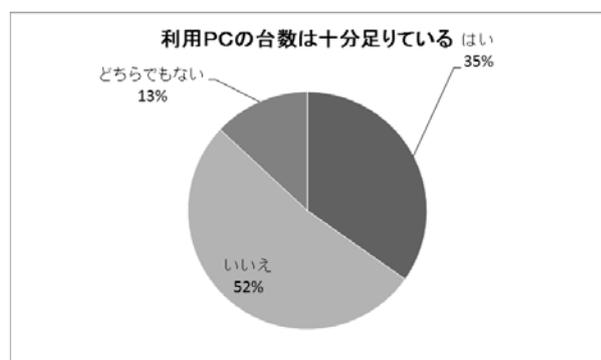


図 15 アンケート結果 (項目 5)

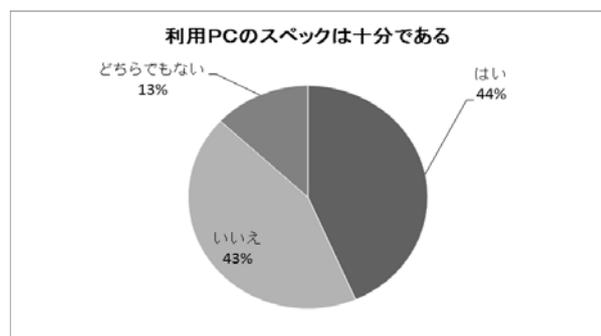


図 16 アンケート結果 (項目 6)

図 15 の結果から、PC の台数が足りないことに不満を持つ学生が多い。部活に参加しても PC が利用できない状況が続くと、モチベーションが下がってしまうため、台数の確保、スペースの確保の問題を解決する必要がある。また、図 16 の結果から、PC のスペックに対しても、不満を持っている学生が多いことが分かる。本校のカリキュラムに沿った授業だけでは、とても満足のいくプログラム開発や、メディアコンテンツの制作をすることができない。現

時点では、コンピュータ部が利用する数理計画実験室よりも、本校情報教育センターの PC のスペックの方がはるかに高い状況であるが、コンピュータ部が取り扱う上級者向けのプログラム開発ソフトウェアが、情報教育センターに導入されていないことや、自由にフリーソフトのインストールが許可されない問題、セキュリティの問題など、情報教育センターを管理する上での多くの問題があり、自由にカスタマイズして PC を利用できないことも、学生の成長阻む大きな要因となっている。

4.2 地域社会への取り組みに対する心境

次に、学生が地域社会への取り組みについてどのように感じているのか、また、入部前と入部後の心境の変化について調査を行った。表 2 に質問事項を示す。

表 2 地域社会への取り組みに対する質問項目

項目	質問項目
7	入部前より後の方が、地域社会に対する興味がでた。
8	コンピュータ部に、地域再生の取り組みは必要だと思う。
9	インターネットテレビはコンピュータ部に必要だと思う。
10	コンピュータ部に入って、実力は上がってきていると思う。
11	入部前より入部後の方が、やる気が出てきていると思う。
12	コンピュータ部はこの学校には必要だ。

4.1 と同様に、質問に対する解答欄は、“はい”、“いいえ”、“どちらでもない” の 3 択とした。もし理由があれば、記入をしてもらった。結果を図 17 から図 22 に示す。

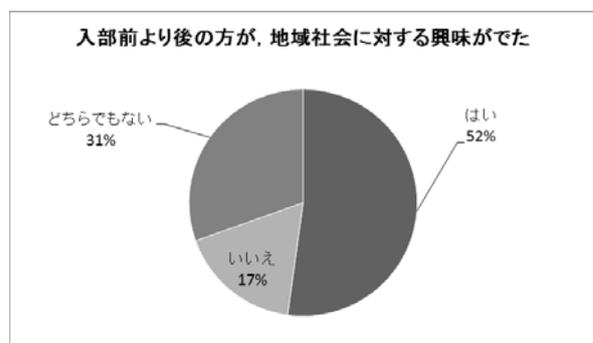


図 17 アンケート結果 (項目 7)

図 17 の結果から、入部してから地域社会に対する

興味は約半数の学生が持つようになった。“はい”と答えた学生のほとんどは、上級生であり、1年生の学生はまだ入部してから半年しか経験していないので、“どちらでもない”と答えている学生が多かった。

次に、コンピュータ部に地域再生の取り組みは必要かを調べた結果を図18に示す。

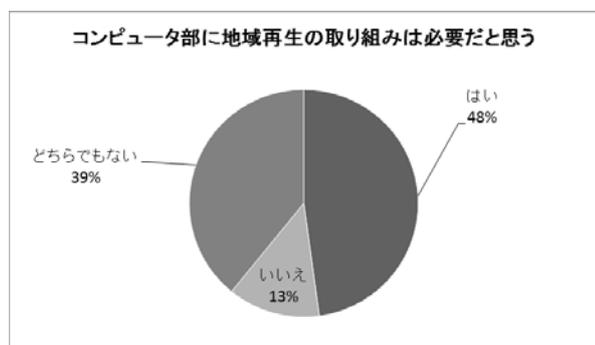


図18 アンケート結果 (項目 8)

図18の結果から、コンピュータ部でも地域再生の取り組みが必要だと思っている学生が半数近くいることが明らかとなった。一方で、“どちらでもない”と“いいえ”と答えた学生が合わせて52% (12名) もいるので、学生の意識の中には、地域再生の取り組みは「やらされている感」が少なくともあるといえる。

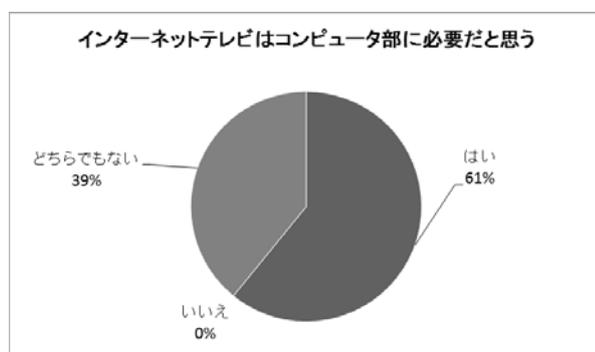


図19 アンケート結果 (項目 9)

しかしながら、地域再生のために行っているインターネットテレビ事業に関しては、図19で示されるように、必要と考える学生が61% (14名) で、“いいえ”と答えた学生は、0% (0名) であった。地域再生の取り組みのうち、インターネットテレビ活動に関しては、ある程度の理解を得られていると考えられる。

1年生の中には、カメラ撮影などの講座を受講したが、まだ1度も取材に向かい出向いておらず、番組制作に取り掛かっていない学生がいるが、今後、彼らが本格的に活動を始めると、アンケート項目7、8、9に関して考えが変わる可能性があり、現在の上級生

のように地域再生を真剣に考えるようになる可能性がある。

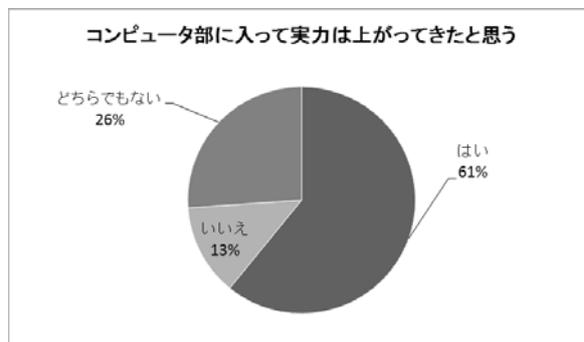


図20 アンケート結果 (項目 10)

図20に、コンピュータ部に入って実力が上がったかについて調べた結果を示す。学生の半数以上は、向上したと答えているが、まだ、39% (9名) の学生が“どちらでもない”、“いいえ”と答えている。部の全体報告会などを見る限りでは、技術的な面は、非常に進歩しているが、一部の学生はそれを感じとってはいないことが分かる。実力の向上については、「やる気」にも直接関わる問題である。

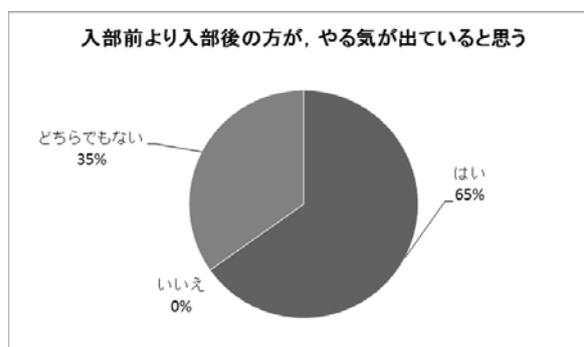


図21 アンケート結果 (項目 11)

図21からも分かるように、やる気が上がった学生が65% (15名)、“どちらでもない”と答えた学生が35% (8名) で、“いいえ”と答えた学生は0% (0名) であった。少しずつではあるが、コンピュータ部の活動は意欲向上につながっているといえる。

最後に、コンピュータ部が本校に必要なかを調査した。図22に結果を示す。必要と答えた学生は、91% (21名)、“どちらでもない”と答えた学生が9% (2名) で、“いいえ”と答えた学生は0% (0名) であった。

このことから、コンピュータ部の存在意義は高く、学生も必要と考えており、実力の向上、やる気の向上へとつなげる大きな要因になっていることは間違いないことであろう。

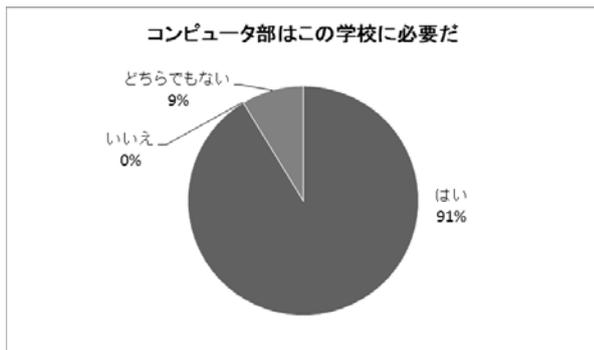


図 22 アンケート結果 (項目 12)

5. 課題と今後の予定

大規模になった本校コンピュータ部の学生指導において、ピラミッド組織にすることが非常に効果的であった。しかし、部員は 40 名を超えており、利用できる PC や周辺機器が限られているため低学年に対しては十分な環境を与えることができない。また、来年度は更に部員が増えると考えられることから、活動場所を複数箇所にするか、部員の選抜を行う必要がある。今後はこれらの問題に対して、最適な環境を学生に与える手法を考えていきたい。

6. 結言

本稿では、内向的な性格の学生が多いコンピュータ部を外交的で社会性のある学生にするために、意識の向上を目指して活動してきたコンピュータ部顧問の指導結果について報告した。インターネットテレビ局を開局し、番組の制作責任ある立場から行わせることで、学生の社会性を広げていく事例を示した。学生の成長を引き出すために指導方法の工夫を数年間かけて試行錯誤して行った結果、本来のクラブ活動として機能する状況まで漕ぎ付けた。そして様々なコンテストに入賞できるまでに至った。

アンケート結果からも、地域再生活動を数年間行ってきた上級生が下級生に比べて、活動の重要性を理解し、努力を重ねてきたことが分かった。低学年は、上級生を手本にして、進歩していることも明らかとなった。

学生は、本業である通常の学校授業を行いながら、時間の合間をぬって番組制作やプログラム開発を行っており、寝る暇も惜しんで活動しているため、負担が非常に大きい。しかしながら、部長をはじめ多くの部員が協力しながら 1 つずつ作品を作り上げ、コンテストで評価され、いつも喜びの顔が絶えない。この喜びがまた次の作品へと繋がり、確実に前進している。コミュニケーションも活発になった。これらの活動を通して、社会に貢献できるほどの目まぐるしい成長が見られたことは、彼らの財産に繋がる

に違いない。

謝辞

本活動は、西京銀行投資信託「山口県応援ファンド・はつらつ長州」寄付金事業として行った。記して、感謝の意を表する。

参考文献

- [1] 北風裕教, 神田全啓, 内向的性格の改善を目指したコンピュータ部指導の成果, 平成 24 年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表概要集, pp.237-238 (2012)
- [2] 北風裕教, 神田全啓, 岡宅泰邦:「地域再生のためのインターネットテレビ局の活動報告」, 論文集「高専教育」第 35 号, pp.613-618(2012)
- [3] 北風裕教, 山田信夫, 岡宅泰邦:「瀬戸内島嶼部における地域再生人材育成事業”島スクエア”」, 映像情報メディア学会アントレプレナー・エンジニアリング研究会技術報告, Vol.34, No51, ENT2010-22, pp.3-6 (2010)

